

米国で視察した品格教育 (Character Education) の実際 (2)^{1,2}

青木多寿子・川合 紀宗¹⁾・山田 剛史²⁾
宮崎 宏志²⁾・新 茂之⁴⁾・橋ヶ谷佳正²⁾
(2012年2月10日受理)

School inspections about character education on the coast of the USA (2).

Tazuko AOKI, Norimune KAWAI, Tsuyoshi YAMADA
Hiroshi MIYAZAKI, Shigeyuki ATARASHI, Yoshimasa HASHIGAYA

The purpose of this paper is to report the inspection of schools inspections that focused on character education on the east coast of the USA, where make advanced efforts to promote character education. This time, we visited schools to learn more details about character education. We interviewed schools from five perspectives; 1) connection among elementary school, middle school, and high school, 2) the relationship between special education and character education, 3) the evaluations to develop the ability and the curriculums, 4) the visual devices to spread it to school and parents, and 5) the essentials of it. We visited five schools; one was a charter school, the other two were religious ones and other two schools were private schools without any religious affiliation. We found that there were various kinds of character education even on the east coast of the USA. We also found that every teachers and staffs devoted his/her efforts and every devices to spread character education. Additionally, we also found that the common similar ideas of teachers and staff members at the school we visited, that is, they strongly expect to let their students to be up stander to make better communities in the future. We discussed not only the essentials of character education but also the differences to adopt character education in to Japan's education system.

Key words: character education, inspection of schools in the USA, habit, special education, evaluations, communities.

キーワード：品格教育 (Character Education), アメリカの学校の視察, 習慣, 特別支援教育, 教育評価, コミュニティ

近年, アメリカの教育がよくなったとの報告を目にするようになった (青木, 1999, 2002a,b; 加藤, 2000, 2004, 2006; 水野, 2006)。アメリカの教育改革の成果が現れた要因は複数あるが, その一つが Character Education だと言われている (加藤, 2004)。Ryan & Bholin(1999)によると Character Education とは「よいキャラクターとは, 何がよいのかを知っており, 良さを志向し, 良さを実践すること (knowing the good,

loving the good, and doing the good)」で, この3つは結びついたものとしている。つまり, よい character とは, 良い行為, よい活動の習慣以上のものであり, 知識 (knowing), 志向 (loving), 実践 (doing) の3つを兼ね備えて良い行動をとる人のことをさす。そして学校教育の中で, これを地域とのパートナーシップでこの品性を磨く教育を行っていかこうとする動きが 1990 年代の中頃のアメリカで生じてきた (Lickona, 1993)。

-
- 1) 広島大学教育学研究科特別支援教育実践センター
 - 2) 岡山大学教育学研究科
 - 3) 同志社大学文学部

Character Education には、日本の学校にはあまり見られないいくつかの特徴がある。一つは、よい習慣を形成するために、幼稚園から高校まで、学校種、クラスの違いを超えて、教育理念を統一して、繰り返し、繰り返し、児童・生徒により習慣が形成されるように働きかけてゆくことである。この点、日本の学校教育は、小学校と中学校で、または、同じ学校でも、学年やクラスによって学級の目標や目指す子ども像が違っていることが多い³。

もう一つの特徴は、習慣は繰り返しが多い方が形成されやすいことから、学校だけでなく、家庭や地域にも働きかけて習慣形成を支援してもらおうとする視点である。このため、Character Education は、家庭や地域の教育力を高める働きもしていると考えられる。この点、日本の学校教育も、家庭には通信や学校便りを配付して努力しているが、そこには、家庭と学校で連携して子どもの人格を育てていくという理念が、家庭に必ずしも伝わっていない印象を受ける。

そこで著者達は、Character Education の持つ特徴について現地視察をすることで、日本の学校への示唆を得たいと考えた。その際、今回の訪問では、5人の異なる専門領域⁴を持つ研究者が同時に Table 1 に示す学校を訪問し、各研究者がそれぞれの専門の立場から Character Education についてインタビューするという方法を取った。そして本稿は、このインタビューを基盤に、①青木は、Character Education を実施する際に、小学校、中学校、高校など、異校種間の連携をどのように図っているのか、また、問題行動の指導との関連性について、②川合は特別支援教育との関係について、③山田は教育評価について、④橋ヶ谷は学校内、保護者との連携を可能にする視覚伝達デザインについて⑤新は日本らしい Character Education の構築に関する哲学・倫理的な問題についてまとめ、⑥最後に宮崎が道徳教育との関連を含めて、日本での今後の展開につ

いて考察をまとめた。

I ; 視察校の概要と異校種間、保護者の連携、問題行動との関連について

1) 公立学校

(a)Academy of the Pacific Rim (MA)

この学校は貧困層が多く住む地域にある小学校5年生から高校までの公立学校である⁵。具体的には51%が貧困層で(61%がアフリカ系, 16%がメキシコ系, 20%が白人, 3%がアジア), 特別支援が必要な生徒は21%在籍している。移民の子が多く、親は生活で手一杯であり、大学に関する知識もない人が多い。この学校は政府からの特別予算をもらって、ハンディ克服に力を入れているチャーター・スクールである。

この学校では、貧困家庭の子ども達に対しては、周囲の期待が低いから、低い成績しか残せないと考え、高い期待をかけることにしている。具体的には、全員4年生大学に入学することを目標とし、100%が4年生大学に入れるように指導する。これらを達成するには、日常のことで、厳しいトレーニングがあつてこそ、成功できると教師達は考えている。このようなことから勉強をすること、高校を卒業し、大学に入ることを習慣にするよう、くり返し指導している。結果は成功しており、昨年は、国籍等の問題があつた一名を除いて、全員、大学に進学できたという。

この学校では、教育理念として西洋のよい所(個人主義, 創造性, 多様性)と東洋のよい所(厳しいルール, 道徳)を取り入れれば、最もよい教育ができるという思想を基盤に Character Education を行っている。具体的には、「誇り」、「改善」、「頑張る(ベストを尽くす)」、「いい人になる」こと、「勇気」を重視する。これらの言葉は、勉強で退学傾向にある生徒に対しては、「これはあなたにとってよい成績か?」と問うときに

Table 1 今回の視察校・センター一覧

<学校>

- (a)the Academy of the Pacific Rim (公立のチャータースクール; 小学校5年生~高校)
- (b)the Jewish Community Day School (私立のユダヤ系の学校; 幼稚園~高校)
- (c)Montrose School (全米, 品格教育優秀校受賞校の私立の女子校; 中学校~高校)
- (d)モンテクレイ・キンバレー学園 (全米 品格教育優秀校の私立学校; 幼稚園~高校)
- (e)The Shipley School (全米, 品格教育優秀校の私立学校; 幼稚園~高校)

<センター>

- (f)Center for Character & Social Responsibility (ボストン大学教育学部)
- (g)Center for the 4th & 5th R's; respect & responsibility (ニューヨーク州立大学コートランド校)

も用いる。これらに関するポスターが目につくところに張ってあり (Fig.1.7.), 教師はこれらの言葉を使って子ども達を励ましてゆく⁶。特に「改善」は、問題行動を指導する際によく使うことばで、「一人がよくなれば、そのコミュニティはちよつとよくなる」と言って聞かせるという。

異校種間の連携については、次の様な手立てを取っている。それは、新学期が始まる前に、中高でミーティングを行い、育てたい生徒のイメージを統一し、指導の方針を確認する。加えて、そして週1回、中高でミーティングを行っている⁷。

Character Education は、特に中学校で力を入れている。2週間ごとに成績とそれ以外のことを記したレポートを保護者に届ける。家庭のアドバイザーがいて、2週間に一回、各家庭に電話をかけている。高校生になったら、学業成績だけを、2週間に1回、届けている。

以上のことから、この学校では、アメリカの大学についてよく知らない保護者が多い中、全員4年生大学進学という成果を出すために、中高連携、保護者との連携に、教員がかなりの時間と労力を裂いている様子が窺えた。

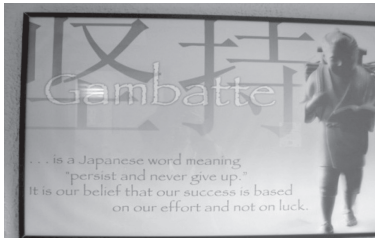


Fig.1. 二宮金次郎と「がんばって」のポスター

2) 宗教色のある学校

(b)The Jewish Community Day School (MA)

この学校は幼稚園から高校までであるユダヤ教徒のための私立学校である。ユダヤ教にもいろんな宗派があるので、respect (礼節;大切にすること)をまず教える。ユダヤ教の根源を教えること、内観して自分を制する人に育てることを重視している。

ユダヤ教の根源として、幼稚園から高校まで、次の5つの価値を伝えることを重視している。最初は(1)多元主義、つまり常に他との違いを理解して尊重すること、他者を知る、自分を知る活動を多く取り入れること、伝統、歴史の中から様々な多様性を学ぶ態度である。次に(2)ヘブライ語、そして(3)学力、そして(4)コミュニティ形成である。コミュニティ形成では、互いに助け合うことを教えている。そして最後が、(5)全人格 (感情、感性を含む)を育てる、ことである。

もう少し具体的に指導方針を述べるなら、1)多元主義では、例えば Fig.2. に示すように、クラスの仲間について、毎回違う人がインタビューする。こうすることで、一人の個人でも多元的に見ることを重視している。次に、2) 代行の先生にもきちんと挨拶をしたか、など、社会に生きる人としての正しい行動様式、3) どんな行動がモラルある行動であるかを「言葉」で伝えること、4) ペア学習と続く。ペア学習とは、たとえば休んだ人への全員からの手紙を書く、自分の課題が終わったら周囲の人を手助けするなど、協力する場面を数多く作って、助け合うことを教えているという。モラル的なことは、言葉ではどの子も良いことを言う。しかし、行動に移すとは限らない。だから教員は、どれだけ自分を律して行動したか、行動でチェックするように努めているようだ。

異校種間の連携については、次の様な手立てを取っている。まず、新年度に「どんな人が人格者か」について、小学校との連続でアイデアを固め、共通のイメージを持つ。加えて、小学校から高校まで、教師は同じ本 (「声かけの方法」「学習と脳」)を購入して学び、それを共通の指導の指針として役立てている。問題行動を起こした際には、叱るのではなく、「もっとよい選択肢はなかったの?」と声をかける。

また、週2回、縦割り活動を行っている。その他、毎朝の礼拝がある⁸。そんなとき、夢や希望、どうあるべきかを宗教との関連で教えたり、年齢の違う子どもたちで意見を述べ合ったりする。これらの全取り組みを通して、バイ・スタンダー (傍観者)ではなく、アップ・スタンダー (行動する人)になれ、と教える。

この学校では、学業もかなり重視する一方で、生徒が行動できる人 (アップ・スタンダー)になるよう、一人で活動できることでも、ペアで活動する機会を多く設けて、幼稚園から高校まで、「助け合うこと」を繰り返し教えているようだ。

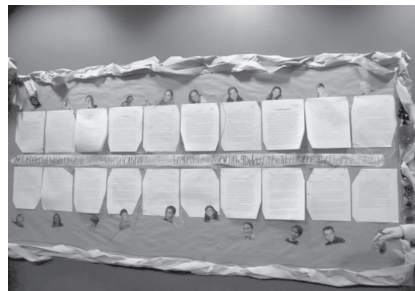


Fig.2. 友人がインタビューして報告する個人紹介

(c) Montrose School (MA)

この学校は小学校6年生から高校まであるカトリック系の私立女子校である。Character Educationでは世界的に知らせた学校であり、この学校の女性校長、Karen Bohlin先生は、Character Educationに関して、何冊も著書を出しておられる第一人者である。この学校では、「信頼 (Faith)」「品格 (Character)¹⁰」「展望 (Vision)」を培い、リーダーを育成することを目的としている。各学年、10個～13個の品格特性¹¹がテーマとして示し、行動する前に、よく考え、他者への影響を考慮して行動するように指導している。

また、この学校には、学業成績についてだけでなく、Characterについてもアドバイザーがいる。生徒達が自分のCharacterを振り返る際には、このアドバイザーと一緒に振り返る。この学校では、教育に関わるVirtue (徳)¹²で次の4つの領域の取り組みがつながると考えている。それは、(a)学問的な領域 (Habit of Mind, Habits of Charter), ②学校風土 (生徒への期待, 生徒の経験, 毎日のルーティン活動), ③特別プログラム (サービス・ラーニング, capstone; Life portrait speaks), ④対人関係 (教師～生徒間, 生徒間), である。

Characterについては、特別プログラムだけでなく、毎日の授業、特に歴史や文学の中で、人物の品格について話題を出す。加えて、毎日の学校生活の中で起こった問題についても、話し合いの中で、徳を持って行動するとどうなるか、という話し合いをする。

これに関し、著者が見せて頂いた中学2年生の授業では、最初に5,6分ほど、「ユニーク」について話し合っていた。そこでは各自が臆することなく、積極的に「自分の意見」を述べていた。具体的には、「ユニークはよい」という生徒もいれば、「ユニークはよくない」という生徒もいた。しかし、「ユニークはよくない」と意見を述べた生徒も、「バスに乗っていて、外国の人が大声で、わからない言葉をべらべらしゃべっていたらよい気はしない。だから、ユニークはよくないときもある。でも、よい気はしなくても、私は徳を持って



Fig. 3. 展望を示すため、卒業生達の活躍を紹介する廊下

行動することはできる。私は敬意を持って行動したい」という意見を述べていた。

3) 宗教色のない私立学校

(d) Montclair Kimberley Academy (NJ)

この学校は幼稚園年中組から高校まである私立の学校である。この学校では、指導の理念の中に哲学を生かしている。古代から現代にまで通用する理念をコア・ヴァリューとして定め¹³、Character Educationのディレクターが中心になって、各学年の理念や指導方針を調整していた。また教師は学校の中で、共通の言葉(コア・バリュー)を使うようにし、「社会で生きる人として準備ができているか」を重視して教育を行っていた。教員研修では、哲学の先生をお招きして、古代哲学を学んでいる。キャンパスが3つあり、教員は普段、顔を合わせないので、全員で集まる機会を設けているという。

コア・ヴァリュー¹⁴を定めるのは、生徒に自分自身を振り返るきっかけを与えるためだという。ある新聞の投書に、今の若者は、自分のモラルについて答えられない、反省できない人が多くなっているとの意見があったそうだ。これらのことから、自分にとって何が大切かを振り返る「語彙」(コア・ヴァリュー)を定め、振り返る練習を積んでおけば、人が生涯において何度も出会う意志決定の際に生かすことが可能だと考えている。

この学校では、Character Educationは、地域をよくするためのリーダーシップ¹⁵と大きな関連があると考えている。そしてリーダーとは、「積極的の行動する人、先頭に立って行動を起こす人」だけでなく、「困っている人を助ける人もリーダーだ」と教えている。しかし生徒のほとんどは「自分には及ぶるはずがない」と思っているという。だから、中高生に、「あなたも世界を正しい方向に導く人になれる」ということを、伝記などを通して伝えたり、生徒会活動、テクノロジー・アドバイザー¹⁶、誇りある学校教育委員会 (honor code) など、生徒がリーダーシップを発揮できる機会を数多く設けて、「あなたにもできる」と勇気づけている。

高校生になるとリーダーシップと関連づけて、9年生と10年生では、倫理の授業を2週間に1回、1回75分で行っている¹⁷。内容は9年生では、respect(礼節; 大切にす), 勇気, 正義について取り上げて、個人のアイデンティティを培うことを重視している。正義とは何かを考えさせることで、市民権, 公民権について考える機会を作っている¹⁸。10年生では、リーダーシップと倫理を取り上げ、リーダーシップをもって活動する場を増やしている。

しかし、だからといって「ああしなさい」「こうし

なさい」と伝えるわけではないとのことだった¹⁹。教師が多様な見方を伝え、生徒がそこから選ぶようにしているという。この学校では、従って、もし問題行動が起こったら、担任と一緒に話し合う。その際、学生の habits (習慣) と choices (選択) を重視して話し合うという。つまり、どのような選択をしたから問題が生じたのか、そのプロセスを理解させる。したがって結果だけを責めるのではない。先生と一緒に分析して、自己分析をさせる。加えて、対人的なスキルを教える。そこでは、人生について語り合う機会を設けているという。



Fig. 4. Character Education の最初のステップとして responsible で respectful なクラスを目指す低学年のクラスの掲示

(e)The Shipley School (PA)

この学校は幼稚園から高校まである私立学校である。Character Education に真剣に取り組んでいるの

は、この中の小学校である。この女性校長、Usha Balamore 先生はインド出身の方で、インドで教師をやっておられた経歴をお持ちである。しかしインドの教育に満足できず、アメリカに留学して勉強をやり直し、道徳性判断の研究で博士号を取った。その後、Character Education と関わるようになり、一時は、大学で教鞭をとっておられたが、どうしても、理論よりも Character Education の実践に取り組みたいとの思い持つようになったと聞く。そんな折りに、この小学校の校長として招かれ、5年前着任なさったとのことだった²¹。

校長先生のお話によると、Character Education の目標は、「エクセレントでデモクラティックなコミュニティを創ること」だとのことだった。「一人一人がよくなれば、社会はよくなる。be the best (よい人になる) と do the best (ベストを尽くす) を目指すように」と、生徒にも教職員にも話をしているという。

これを実践するために、「コンパクト (約束)」という仕組みを導入しておられた。これは、Table 2 に示すように、民主主義的なクラスを創るため、教師と生徒が何について力を合わせるのかを明確に記したクラスの目当てである。このコンパクトを、教師と生徒の話し合いで具体的に決めてゆき、学年が進むにつれて内容を深めてゆくという。こうして、よいクラスを創るために、生徒一人一人がどんな貢献ができるのかを具体的に示し、その貢献を認める仕組みを造っている。

校長先生は、また次の様な話をして下さった。「人は、島の住人が自分一人だったら、自分のことだけ考えて

Table 2 コンパクト (約束)

素晴らしくなるための約束

新しいことにチャレンジし、親切で楽しいクラスを創るために

みんながベストをつくし、最も創造的な仕事ができるのを助けるために

みんなが参加でき、安心でき、大事にされ、互いに大切にすることを助けるために

生徒は〇〇をします

- ・必要なときは先生、友だちに助けを求めます
- ・荷物を整理し、服装をキチンとします
- ・いつも、一生懸命やります

生徒は〇〇をします

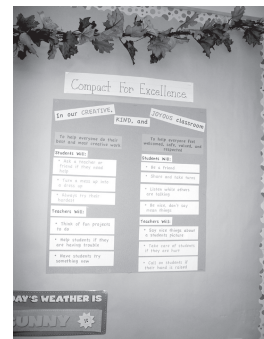
- ・友だちになります
- ・順番を守り、互いに分け合います
- ・他の人の言うことをキチンと聞きます
- ・いつも親切にし、意地悪をしません

先生は〇〇をします

- ・生徒の絵が上手なときは褒めます
- ・生徒が困ったら助けます
- ・新しいことに挑戦できるようにします

先生は〇〇をします

- ・生徒の絵が上手なときは褒めます
- ・傷ついた生徒がいたら対応します
- ・手を挙げたら指名します



いればよいが、二人になった瞬間から、相手のことを考えて、他者と分け合う必要が生まれてくる。トラブルが起こったら、動物なら決闘をする。しかし、私たちは人間なので、言葉を持っている。だから、言葉で話してみても、と伝える。「話してみても、話してくれたら、どうやって助けるかを考えてみるから」と、自ら率先して教師にも生徒にも伝えている。このような対話を毎日繰り返す中で、問題が起こったとき、考えすぎて何も行動しない人に育てるのではなく、相手のことを考えて行動する人を育てることを目指しているという。

これを実践するため、他者のために役立つことに積極的に取り組ませている。例えば、私たちが見せて頂いたビデオには、小学校3年生が、ハロウィンの際に余ったお菓子を持ち寄って、それを全員で袋に詰めて、箱に詰めて、戦場の兵士に届ける活動に取り組む姿があった。この活動で重視しているのは、算数（袋詰め、箱詰め）や社会（戦場の兵士）などの教科との関連だけでなく、とにかく「全員が少しずつ関わる」ことだった。そしてこの活動を通して、「小学校3年生でも、社会をよくすることに関われる」ことを体験させることを重視していた。この「全員が少しずつ関わる」という目的を果たすため、例えば、お菓子の箱をトラックに載せる際にも、子ども達がバトンリレー方式で、ちょっとずつではあるが全員で箱を教室からトラックまで運んでいた。

この学校は、異校種間の連携がまだ始まっていないので、連携についての情報は得られなかった。しかし保護者との連携については、毎週木曜日の朝、4年生の簡単な発表会を行っている²²。アメリカでは毎朝、保護者が車で子どもを学校に連れてくる。この仕組みを応用して、朝に小さな発表会を行う。そしてその発表会の前に、校長先生が Character について簡単に話をする。それは例えば、この学校で使っている言葉の説明やコンパクトの主旨、これらを家庭でも使って欲しいというお願いであり、Character について、少しずつ理解を深める内容だとのことだった。

以上のように、今回視察した学校は、宗教色のある学校もない学校でも、学校全体の背骨となる理念や考え方をもち、学校内、保護者、地域に積極的に働きかけている様子が窺えた。

例えば、異校種間連携の方法としては、新年度に同じ指導イメージを共有する等の工夫をしているところ ((a)(b)) や、それに加えて、アドバイザーやディレクターを中心に連携を強める工夫をしているところもあった ((c)(d))。校長先生が中心となって、熱心に押し進めているところもあった ((a)(c)(e))。保護者との

連携については、驚くほどの創意工夫を発揮して熱心に取り組んでおられる様子が窺えた ((a)(e))。

次に問題行動への対応については、日本とは違っているように思えた。それは、どの学校も、問題行動について、叱ったりよい行為を直接教えたりすることを重視するのではなく、問題行動が起こったプロセスと本人の意志決定について振り返り、あくまで本人が自分の意志で自分の行為を選び取ることを重視していたからである。

これらのことから、Character Education は、社会を少しでもよくするために、未来の構成員である児童・生徒のひとり一人が、自分自身で考えて、少しでもよい行動が取れるように、そして、それを通して「社会に出る準備」をしようという教師の熱意が推進力になっているように思えた。そしてこのように考えると、アメリカの Character Education には、それが良い悪いは別にして、日本の学校とは本質的に異なる風土の上に成り立っている部分があるように感じられた。

II ; 特別支援教育の観点からの Character Education

今回、我々は Table 1 に示す 5 つの学校を視察した。いずれの学校も Character Education 実践優秀校であり、大きな成果を上げていた。本節では、これらの学校を視察しての気づきを、筆者の専門領域である特別支援教育の観点を中心にまとめることとする。

今回視察した学校の特徴をいくつか挙げると、まず、全ての学校が、Character Education だけでなく、学力にも重点を置き、子どもたちを一流大学へ進学させることを大きな目標の 1 つに掲げていたことである。いずれの学校の教師も、子どもたちに学力と Character を同時に身に付けさせることの重要性について述べていた。この背景には 2 つのことが考えられる。1 つ目は、一流大学を卒業した者は、地域や国、あるいは世界のリーダーとして活躍する可能性が高い。そのため、将来リーダーになる可能性の高い子どもたちに Character Education を行い、人格の備わったリーダーを育成することを目指していることである。2 つ目は、多くの学校が乱立する地域で自校の特色を出し、そこに通っている子どもたちの評判を上げることによって学校を存続させることである。2002 年に施行された No Child Left Behind 法によって、全ての学校において学力の底上げが行われるようになった。公立学校に通う子どもたちの成績が上がるにつれ、高い授業料を設定している私立学校は、公立学校との差別化を図る必要に迫られるようになった。そこで、学力の付加価値

として Character Education の導入や拡充が行われたと考えられる。

次に、Academy of the Pacific Rim(a) はチャーター・スクールだが、それ以外の 4 校はすべて私立校である。これら私立校の授業料は、学校間や校種によっても異なるが、おおよそ幼・小学部で \$23,000 ~ \$25,000、中学部で \$25,000 ~ \$28,000、高等部で \$28,000 ~ \$30,000 が相場である。一部奨学金制度があるものの、多くの場合、日本の国立大学に 4 年間通える額を毎年支払えるだけの財力がある家庭の子どもたちが、こうした私立校に通うことができる。つまり保護者は、何らかの形で地域社会において成功し、リーダーシップを取っている可能性が高い。こうした背景にある子どもたちに学力と Character を身につけさせることは、さほど困難ではない可能性がある。

こうした背景があるにせよ、Character Education を行い、学力だけでなく人格も身につけさせる努力をし、私を捨てて公に尽くす本来のエリートを育成しているところについては、日本の国立大学附属校や有名私立校は見習うべきである。日本の場合、罪を犯した官僚や政治家を見ると、エリートたるべき人物が本来の職務を全うせず、私利ばかりを追求してきた例が多い。こうした輩は本来エリートの風上にも置けないのだが、なぜか日本ではエリートとして丁重に扱われるし、本人たちもそのように扱われることが当然のように思っている。子どもたちの学力を伸ばすことは重要だが、それだけではこうした私利私欲に走るリーダーを生み出すのみで、日本社会は一向に良くならない。平成 22 年度の東京大学卒業生の就職率データによると、卒業生のうち 11.4% が非就職者（大学院進学者を除く）である。こうしたデータを見ても、勉強だけできれば良いという時代は既に終焉を迎えていることが明らかなのだが、次にどこへ向かえば良いのか、東大卒の職員が多い文部科学省を始め、誰も正しい答えを持っていないのだろう。

今回の視察で会談したニューヨーク州立大学コートランド校 (Table 1, (g)), Thomas Lickona 教授によると、Character Education 優秀校は、必ずしも私立校だけでなく公立校にもあるとのことだった。ただ、特別支援教育を受けている子どもがどの程度 Character Education を享受しているかを尋ねたところ、不明とのことだった。その背景には、アメリカでは日本のような特別支援学校がほとんどなく、特別支援教育の対象となっている子どもたちの多くが地域の公立学校やチャーター・スクールに通っていることもある。しかしその他に、先述したように、人格と学力を結びつけ、将来のリーダーを育成することを目的として Character

Education が位置づいていることが考えられる。もちろん将来地域や国、世界を引っ張るリーダーに人格は不可欠だが、人格は誰にも備わっていなければならないし、誰もがより完成した人格者を目指して生きていく必要がある。特に特別支援教育の対象となっている子どもたちは、人生において何かと壁にぶつかることが多く、自己肯定感や自己有用感が低下する可能性が高い。周囲からのサポートに加え、本人が生きる意味や価値を実感するために、Character Education は大きな役割を果たすのではなからうか。そうした意味では、Academy of the Pacific Rim(a) は、KAIZEN (改善) GAMBATTE (頑張つて) をモットーに、貧しい地域の子どもを変え、保護者を変え、地域を変えてきた。今後は、こうした困難地域で Character Education を実施している学校や Character Education 優秀校に選ばれた公立学校、Character Education が必ずしも成功していない学校の実情を視察することができれば、さらに Character Education の本質に迫ることができるのではないかと考えている。

III ; Character Education の評価について

教育や新しい取り組みには、常に「成果はあったのか」という評価の問題がつきまとう。では、Character Education はどのような評価がなされているのだろうか。そこでここでは、評価を中心にまとめてみる。

教育評価の目的は一般に、①教師の指導目的、②児童・生徒の学習目的、③管理目的、④研究目的、に大別される (橋本, 2003)。ここでは、①と②をまとめて個々の児童・生徒レベルの評価、学校レベルの評価 (①と③の目的を含む)、研究としての評価、それぞれについて、視察した学校や大学に於いて、Character Education の評価がどのように実践されているのかを整理する。

1) 個々の児童・生徒レベルの評価

The Jewish Community Day School(b) では、児童・生徒の評価は、プログレスレポート (student progress report) で行われている。Character Education の評価は、Social skills の中に包含される。小学校段階では、A,B,C のような評点はなく、到達された成果が文章により具体的に記述される。中学校のプログレスレポートには、Work habits と Social skills の 2 観点があり、それぞれの観点ごとに到達目標が下位項目として 3 から 5 ほど設定されている。下位項目にはそれぞれ 5 段階の評点 (NI=Needs Improvement, WS=With Support, S=Sometimes, U=Usually, C=Consistently) がつく。評点だけでなく、コメントも書かれる。

Montrose School(c)では、評価は自己評価を重視している。ただし、一人でやらせるのではなく、アドバイザーと一緒に自己評価を行う。

Montclair Kimberley Academy(d)でも同様で、先生が個々の生徒を評価するのではなく、個人が内観して内省して、向上したかを知ることには意味があると教師は考えている (Kerry Verrone 先生の発言より)。個々の児童・生徒にポートフォリオを作らせている。2009年から EVERNOTE (<http://www.evernote.com/>) を利用したデジタルポートフォリオを導入している。また、外的基準としてルーブリックが用意され、ルーブリックに基づく評価も同時に行われている。

The Shipley School(e)でも Character Education の評価には、自己評価が用いられる。事前にルーブリックが提示され、子ども達にルーブリックの説明が行われる。また、ルーブリックは親にも伝えられ、それにより、どのような観点で子どもを評価しているのか情報を提供している。

まとめると、個々の児童・生徒の評価には、真正の評価 (Authentic Assessment) がより多く用いられている。現実の生活に即した課題 (例えば、近所の高齢者についてその人の半生を記録する伝記を書くなど) が与えられ、児童・生徒はその課題について一定期間をかけて取り組む。こうした課題には、縦断的な個人内評価やルーブリックを用いた評価、いわゆる質的な評価がより適しているが、同時に量的な評価も併用するマルチメソッドによる評価が試されることが望ましいといえる (Lickona 先生の発言より)。

2) 学校レベルの評価

個々の児童・生徒レベルの評価を超え、学校全体で取り組まれた Character Education の成果を実証的に評価するためにいくつかの実践がなされている。

例えば、Montclair Kimberley Academy(d)では National School Climate Center による School Climate Measured を利用している。この調査はコンサルテーションを目的としたもので、生徒・教師・保護者の学校満足度等についての評価を得るために3年ごとに実施しているということである。調査の結果は Web でフィードバックされ、教育プログラムの改善等に役立てられる。

The Shipley School(e)では、Character Education の目標を箇条書きに整理したコンパクト (compact; Table 2) が各クラスに掲示されている。毎年1月にコンパクトの評価が行われる。これは教師と子どもが一緒に取り組むもので、コンパクトについて今年の振り返りと新しい年の目標決めを行う。

学校がどの程度 Character Education を導入できたかを測る調査の規準に 11 principles survey がある。これ

は、CEP(Character Education Relationship)が実施するもので、各学校から書類による申し込みがある。それに加えて、CEPの委員が2人各学校に派遣され評価を行う。それらをもとに、National School of Character Award という賞が贈られる (毎年10~11校程度)。11の原理の中のある特定のものに良いスコアだったときは、その学校にも賞が与えられる (ただし、予算の削減等の事情から、2011年からは書類による選考のみになったと言うことである)。

また、CREE (Collective Responsibility for Excellence and Ethics, Khmelkov & Davidson, 2008) や CEEA (Culture of Excellence & Ethics Assessment, Khmelkov & Davidson, 2009-2011) は、生徒、学校、保護者を対象とした学校風土 (school culture) を測定する調査である。CEEA に関する情報は以下の WEB サイトから閲覧可能である。<http://excellenceandethics.com/>

3) 研究としての評価

Character Education の実践は研究という観点から見た時にどのような成果を上げているのか。それを実証・確認するために評価が行われる。例えば、ボストン大学の Seider 助教授は、学力に関する変数 (GPA のスコアなど) と Performance Character との関連を共分散構造分析により検討している (Seider, 2011)。

また、2003年に、Journal of Research in Character Education 誌が刊行され、Character Education の効果に関する研究が広く紹介されるようになってきている。この雑誌は年2回出版され、Peer Review のある学術雑誌である。

その他にも、Character Education の効果を測定する試みとして、Post & Neimark(2007)はたくさんの質問紙を提供しているし、Park & Peterson(2006)でも自己報告式の質問紙が作成されている。

最近実施された具体的な調査研究を1つ紹介しておく。近年、アメリカの学校では生徒のキャンピングが問題視され、社会的な問題となっている。McCabe(2011)は、そうした社会的な関心に応えるべく、心理学的な尺度を用いた調査研究 (Academic Integrity Survey) を実施している。

IV ; Character Education における視覚伝達デザインについて

学校がどんなにより理念を持っていても、それが学校内の教師や生徒、保護者などに伝わり、知ってもらわなくてはそれらはないに等しい。では、Character Education の理念を学校内や保護者に伝えるためにどんな視覚的な工夫をしているのだろうか。ここ

では視察・訪問から見た、アメリカの Character Education(character education)における視覚伝達について、ヴィジュアルコミュニケーション(視覚伝達)デザインの視点から報告する。

1) ポスターおよび、その活用について

校種に関係なく共通に行われていたポスターの活用がある。それは、それぞれの学校が character education を教育カリキュラムのコアとしていることを学内外にアピールすることを目的とするものである。(Fig.5,6.)

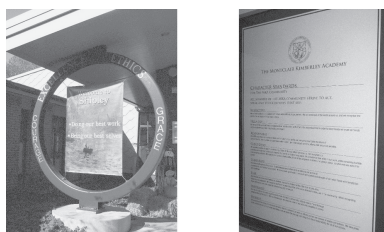


Fig. 5. The Shipley School (e) の玄関

Fig. 6. The Jewish Community Day School (c) の校内

Fig.5. は、明るく優しい印象派の絵画を Character Education のイメージとしたポスターを玄関に表札のように展示して教育方針をアピールしていた。

Fig.6. は、Character Education の中身を端的に箇条書きした文字だけのポスターで、校内の壁や主立った部屋に展示され教育方針をアピールしていた。

視覚伝達デザインは、子ども達の発達段階の違いから学校種での違いが見られた。中・高等学校では、生徒の Character Education 意識を高めるためにポスターが使用されていた (Fig.7.)。



Fig. 7. The Academy of the Pacific Rim(a)

Fig.7. の the Academy of the Pacific Rim では、Character Education にアジア的視点(日本、中国；日本と中国を混同しているようであったが)を導入しており、Character Education を外国、特にアメリカだけに目を向け捉えるのではなく、日本の歴史・文化を見直すことを示唆されているようで興味あるものであった。文字表現で漢字(中国の略字)を使用している点も一つではあるが、特に興味深かったのは、貧しさの中で働きながら学び、人として成長した二宮尊徳(金次郎)を Character Education のイメージビジュアル

として使用している点である。

2) 人間関係・教育環境づくりと掲示・展示について

一つの課題における子どもたちそれぞれのものの見方・感じ方を絵や言葉・文章で表現した作品やレポートを、教員が見やすく美しく掲示・展示をし、素晴らしい教育環境をつくり出していた。(Fig.8.)



Fig. 8. The Shipley School (幼稚園)

またこれは、教員が広い視野で子どもたちそれぞれを認め、受け入れていることを子どもたちに示すとともに、子どもたち同士がお互いを知り、理解し、人間関係づくりや社会性育成にも関わっていると思われた。自分の思いや考えを表現する言葉や文章表現の未熟さを絵やイラストレーションを多く使用していた幼稚園、小学校における掲示・展示に日本との大きな違いや差が見られた。

3) Tomas Lickona 教授 (Table 1. (g)) の訪問から

教授は Character Education の第一人者である。教授は、教材開発も行っていた (Fig.9.)



Fig. 9. カード式教材

Fig.9. は、自分を振り返ったり生活習慣や行為について考えたりして Character Education を確かなものにしていくためのカード式の教材である。内容を言葉や文章と優しく分かり易いイラストレーションを的確に使用していた。教材の視覚伝達の応用展開に参考になった。

V ; Character Education を日本で展開するには

Character Education を日本の学校で展開していこうとすれば、Character Education が、いったい、どのような教育を言うのか、あるいは、Character Education

によって子どもたちになにを伝えればよいのか、Character Educationの内実を明らかにしなければならない。というのも、この考察を欠いては、Character Educationの導入は、その名称の借用だけに終わりがねないからである。それゆえ、本報告書では、視察した個々の学校の特異性に注目するのではなくて、そうした学校のとり組みを貫いて看取できる契機に照準を合わせ、Character Educationの一局面を露わにしたい。

各学校が共通して力点を置いているのは、「共同体」(community)という視点である。家族であろうと、仲間であろうと、学校であろうと、住んでいる地域であろうと、社会であろうと、国家であろうと、共同体の成員として共同体の構築に積極的に参画しようとする態度を、陰伏的にであれ、陽表的にであれ、育成しようとしている。「共同体」は、ひととひととのつながりで成りたっているのであるから、「共同体」の基盤には、互いの意見を交換しあいながら、互いに分ちあえる観点を模索するための「意志疎通」(communication)と、「共同体」のなかで生起するさまざまな問題を、互いに力を合わせて解決していくための「協働」(collaboration)がなければならない。

こうした「意志疎通」と「協働」の健全性を担保するためには、「関係性」(relationship)への配慮が要請されることは言うまでもない。この配慮を組成しているのは、かかわり合いがこれから成就していこうとしている他者に対する「応答可能性」(responsibility)と「尊重」(respect)である。すなわち、仲間の人格を大切に扱い、仲間の必要に応えながら、想いを共有すること(sympathy)によってはじめて形づくれる、ひととひとの結びつきこそ、互いの考えのやりとりと、問題解決のための助け合いを礎にして成立している「共同体」を支えているのである。

「共同体」について、このような理解ができるとすれば、Character Educationのねらいのひとつは、ひとの集まりが醸し出す関係的空間の共有に参与できる資質の涵養にある、と言えるのである。

VI ; 日本での今後の展開のために

今回の視察では、公立学校、私立の宗教系の学校、非宗教系の学校を視察した。このように、それぞれの特徴は異なっているが、全体を通して、一貫しているものがあるように思える。それは、学校の中だけでよい振る舞いができることを求めるのではなく、学校の外に出てもそれを発揮し、少しでも、自分のできる範囲で社会に貢献できる人になるように、という願いであるように思えた。そしてそれを目指して、小学校、

中学校、高校などの学校種の違いにかかわらず、学校と全教職員が全体として保護者を巻き込んで、公立学校でも7年をかけて、よい行為を習慣化しようとする姿が垣間見えた。

友だちや知人の多い学校の中だけでよい振る舞いをするのは比較的簡単であり、日本の学校も、この点に関してはかなり高いレベルにあると思われる。しかしそれを学校の外でもできることを目指すなら、今の日本の取り組みでは不足しているものもあると考えられる。

その中で、今回の視察では、「学校内」という限定を越えて、各学校共に、自分自身を振り返る機会や、他者をケアすることの意味について考える機会を提供するため、いろんな工夫がなされていることが読み取れた。アメリカの場合、地域にもよるが、教会などでの集まりや行事を通じて、普段から同年齢の人以外の人々との交流の機会があったり、他人と積極的に議論する文化があったりする。また、宗教活動を核としたボランティア活動はかなり盛んであり、組織的なボランティア活動に参加することも日本よりは容易であるに違いない。実際に、今回の視察でも実感したことだが、サービス・ラーニングのような地域貢献にイベント的に取り組む活動は積極的に取り組まれているようである。

しかし、そのような取り組みの意義は十分に評価できるものの、なお気がかりな点もある。現実的に考えれば、他人への配慮が身に付くような取り組みは、学校が主体的に行う場合には、普段から面識がある人たちか、あるいは、面識が無くても、学習者たちと関係を築こうという意志をもって学習者の面前にあらわれている人たちとの連携が中心となって学びをつくっているという点である。したがって、社会に貢献する人の育成を目指すならば、視野におさめておかなければならないことがある。すなわち、上述した学びの状況は、街中でたまたま遭遇する、助けを求めている見知らぬ人と出会う場合のそれとは異質であるということである。

これらのことから、ネル・ノディングズ(2006)の見解に従って考えれば、アメリカでも日本でも、上述した学びが、ほとんど面識もなく、最初から自分との関係を築こうとしてくれているかどうかかわからない相手に対する行為にまでもつながっていくのであろうかという素朴な疑問が生じる。普段関わりがあり、親しみの情がある相手への配慮ある行為と、ほとんど面識もなく、最初から自分との関係を築こうとしてくれているかどうかかわからない相手への配慮ある行為とは、異なるものであろう。つまり、今回の報告で伺われる

ような取り組みが効果を上げているとしても、本当にアメリカにおいても、ほとんど面識もなく、最初から自分との関係を築こうとしてくれているかどうかかわからない相手に対する行為にまでもつながっているのであろうかという素朴な疑問が生じるのである。

ここで、民主主義に関する強固な信念に支えられ、日本より宗教が大きな影響力を持っているようなアメリカの文化的、社会的な土壌からすれば、ほとんど面識もなく、最初から自分との関係を築こうとしてくれているかどうかかわからない相手ということを経験想定した取り組みは必要ないといわれるかもしれない。しかし、少なくとも日本の場合には、地域や学校は、宗教や思想などによって、そのコミュニティを形成しているわけではない。したがって、日本で品格教育を実践する際には、「面識のない相手に対する配慮ある行為」という観点から、学校という枠を超えた、地域をも巻き込んだ取り組みも付け加えていく必要があるだろう。このように考えると、Character Educationを日本で展開するには、その理念や評価方法、連携の仕組み等を取り入れるだけでなく、さらに一歩踏み込んで、ひととひとの結びつきを育ていけるようなコミュニティを形成するにはどうしたらよいか、を考えてゆく必要があるように思われる。

引用文献

- 青木多寿子 1999 「アメリカの小学校ー The basic school 実践校のケースレポート」 岡山大学教育学部附属教育実践総合センター研究年報、第2号、11-20.
- 青木多寿子 2002a アメリカの小学校における道徳教育の現状 道徳と教育 No.310・311 Pp.58-78.
- 青木多寿子 2002b 「アメリカの小学校に見る品性徳目教育とその運用」岡山大学教育実践総合センター紀要 第2巻、Pp.47-59.
- 青木多寿子 2011 「もう一つの教育；よい行為の習慣をつくる品格教育の提案」青木多寿子 編 ナカニシヤ出版
- 青木多寿子・森敏昭・池田隆・児玉真樹子 2009 規範意識を育む教育実践活動の開発；品性・品格教育を基軸とした生活目標・学校目標に関する考察 広島大学大学院教育学研究科 平成21年度 共同研究プロジェクト報告書（第8巻）、Pp.85-98.
- 橋本重治（原著）、応用教育研究所（編）2003 教育評価法概説（2003年改訂版） 図書文化
- Hendrix, W. H., Luedtke, C. J., & Barlow, C. B. 2004. Multimethod approach for measuring changes in

character. *Journal of Research in Character Education*, 2, Pp.59-80.

加藤十八 2000 「アメリカの学校から学ぶ学校再生の決め手ーゼロトレランスが学校を建て直した」 学事出版

加藤十八 2004 「アメリカの事例に学ぶ学力低下からの脱却ーキャラクターエデュケーションが学力を再生した」 学事出版

加藤十八 2006 「ゼロトレランスー規範意識をどう育てるか」 学事出版

Khmelkov, V. T., & Davidson, M. L. 2008. *Collective Responsibility for Excellence and Ethics (CREE): Reliability and Validity (Version Culture of Excellence & Ethics Assessment (CEEA): Conceptual model.*

Lickona, T. 1993 *The return of character education, Educational Leadership*, November, Pp.6-11.

リコーナ, トーマス 2006 「人格教育のすべて」 水野修次郎, 望月文明訳 麗澤大学出版会 (“Character Matters: How to help our development good judgment, integrity, and other essential virtues. 2004)

McCabe, D. 2011. *Academic integrity survey: Sample items, high school version.* In T. Lickona & M. Seales(Eds.) *excellence & ethics*, winter.

ノディンクス, ネル 2006 「ケアリングの現在」 中野啓明・伊藤博美・立山善康（編） 晃洋書房

Park, N., & Peterson, C. 2006. *Moral competence and character strengths among adolescents: The development and validation of the Values in Action Inventory of Strengths for Youth.* *Journal of Adolescence*, 29, Pp.891-909.

Post, S. & Neimark, J. 2007. *Why good things happen to good people: The exciting new research that proves the link between doing good a living, a longer, healthier, happier life.* Broadway Books: NY.

Ryan, K. & Bohlin, K. E. 1999 “Building Character in Schools; practical ways to bring moral instruction to life.” Jossey-Bass A Wiley Imprint

Seider, S. 2011. *Private presentation at Boston University at lunch meeting.* October 31st.

参考資料

- Academy of the Pacific Rim; Annual report (2011).
- Balamore, U. Private presentation at Shipley (2011).
- The Jewish Community Day School. Sample of Student progress report (2011).
- Montclair Kimberley Academy Foundation (2011).

- Montrose School; Education Women of Faith, Character & Vision (2011).
- The MKA Ethics Program(revised), The Montclair Kimberley Academy (2011).
- Responsible independent learner rubric (2011).

注

- 1 本研究を実施するにあたり、科学研究費（基盤研究B; 課題番号 23330263; 代表, 青木多寿子）を使用した。本研究をまとめるに当たり、多くの学校を紹介して下さったボストン大学の Bernice Lerner 上級研究員、モンテクレッキンバレー学園の品格教育ディレクターの Karen Newman 先生、ニューヨーク州立大学コートランド校の Thomas Lickona 先生にお礼申し上げます。また、各学校で多くの方がご多忙の中、話を聞かせて下さいました。心からお礼申し上げます。
- 2 Character Education は、「人格教育」「品性・品格教育」「品格教育」など、複数の言葉に翻訳されている。今回は、執筆者が多く、Character Education に対する考えも、執筆者によって少しずつ異なる可能性が予想されるため、あえて統一した訳語を使わずに、Character Education と表記することにした。
- 3 これについて、青木・森・池田・児玉（2009）は、ある教育委員会管轄の全小中学校 50 校の生活目標の調査と行った。その結果、小中で連携している学校は、1 ペアに過ぎなかった。
- 4 今回は、発達・教育心理学、特別支援教育、教育評価、プラグマティズム、視覚伝達デザインの専門家で視察グループを構成した。なお、宮崎は視察には参加せず、我々の持ち帰った資料を基に本稿の考察を書いた。
- 5 当初、この学校は、一般のアメリカの学校のように、6 年生から高校生を受け入れていた。しかし、6 年生からではどうしても英語力が大学入試までに追いつかないこと、加えて、勉強の習慣を付けさせようとすると、どうしても 6 年生からでは遅い、ということで、5 年生から受け入れることにした。その結果、学生の態度もよくなり、進学率もよくなったという。
- 6 この学校では「二宮金次郎」がシンボルマーク。二宮は、積極的に責任を果たしながら、かつ、家族を思いやり、それでも学び続けることを諦めなかった人。「こんな生き方ができるんだ」という例として示している。
- 7 新採の教師には、必ずメンターをつけ、加えて新学

- 期前に 1 週間のトレーニングと月に 2 回のトレーニングを行っている。
- 8 宗教系の学校は、どちらも全校生徒が集まることのできる美しく厳かな礼拝堂を持っていた。
 - 9 個人を多元的に知るため、個人を他者がインタビューして紹介する活動を行っている。1 クラスで、1 年間で全員が互いに相互に紹介し合えるように計画している。
 - 10 この学校のパンフレットによると、ここで Character は、次の様に説明されていた。それは、「自分についての的確で深い知識」「コミュニティに積極的に参加し、貢献する、開かれた愛する心」「自信 (confidence), 進取の精神 (initiative), 勇気 (courage)」「自分の自由を責任を持って使う智恵」「他者に対して、自分自身の考えに基づき、ハッキリと、しかも深い敬意を持って話すことに挑戦する能力」である。
 - 11 この学校で取り上げられている品性徳目は、6 年生では Fortitude, Self-awareness, Friendship, Order, Good use of time, Obedience & Self-control, Gratitude, Cheerfulness, Courtesy & respect, Honesty, Sociability, 高校 3 年生では、Service, Charity, Time-management, CLDs to middle school students, Learning style, Self-knowledge, Integrity, Gratitude, Healthy living, となっている。
 - 12 Bholin 先生は、価値と徳を区別して考えている。「価値」とは、例えば「好み」のように、志向はあっても必ずしも行動に表す必要がないもの、「徳」とは、正直さや寛容など、考えと行為が一致して現れるものである (Ryan & Bholin, 1999)。
 - 13 この学校の品性徳目は、respectful, friendly, responsible, confidence, temperate, fair, informed, honesty である。
 - 14 教科教育の中に、品格を取り入れるのが難しいので、現在はモラル・ハビット（道徳的な習慣）とアカデミック・ハビット（勉強の習慣）の二側面に分けて捉えているという。
 - 15 体育では、スポーツマンシップを教え、負けたときの態度を学ばせるため、多種多様なスポーツを経験させることのことだった。
 - 16 小学校 5 年生から高校生で構成される委員会。委員会が作ったテストに合格した人に、一人 1 台、ノート型パソコンを貸し出す。デジタル社会の市民として、リーダーとして、どうあるべきかについて、テストの内容を考えたり、どんな注意が必要か、どんなことを書いてはいけないのかを、教師と一緒に考える。ネット上での人格も問題にする。他の教師や保護者にも理解してもらえる教材

も作っている。

- 17 最終学年では、政治哲学を教えているとのことだった。
- 18 例えば、権力者が自分の好みやくじ引きで人を殺す社会があったとしたら、それはよい社会だろうか？という問題について考えさせる。哲学に重点を置いた考え方をさせて、富や生活の質についても考えさせる。
- 19 Character について、先生が生徒を評価するのは意味がない。個人がポートフォリオを使って、自分

の考えの変化を振り返ることが大切だと共通認識しているという。

- 20 例えば、気の進まない誘いをうまく断れない生徒には、上手な断り方のスキルを教えている。
- 21 校長先生のお話では、インドの教育は、教師が主導で、生徒は教師の言うことに従う教育だったそう。しかし、アメリカの教育は全く違っていたそう。
- 22 4年生に毎年実施してゆけば、数年すればすべての保護者に学校の方針と意図が伝わることになる。